

---

# 姫巫子

春秋

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

姫巫子

### 【Nコード】

N8085A

### 【作者名】

春秋

### 【あらすじ】

姫巫子。八百万の神々に愛されし者。少女の全ては神々のもの。

少女は己の定めを知り全てを受け入れてなお、未来を信じる。

## 夢

悲しい時。

落ち込んだ時。

怒った時。

寂しい時。

言い知れぬ孤独に陥った時。

必ず思い出す一つの夢がある。

幼いときにただ一度だけ見た色鮮やかな、決して色褪せることのない不思議な夢。

信じられないほど青く澄んだ雲一つない美しい空。

足元に広がる青々と生い茂る柔らかな若葉。

心地良い風が頬を撫で、優しく草木を揺らす。

そして、満開に咲き誇る桜が辺りを柔らかな薄紅に染める。

時折、風に乗って薄紅の花びらが舞う。

見たこともない美しい風景の中、それでも自分の目を惹き付け離さなかったのは、その風景に溶け込み、更なる美しさを持つもの。

咲き誇る桜に囲まれた広い空き地の中央で目を閉じ無心に舞う、年の頃4つか5つ頃の幼い女の子。

身に纏っていたのは布を重ねた見たこともない優雅な衣装。

女の子の動きより一拍遅れて柔らかく揺れる白く長い袖。繊細な細工の施された薄紅色の扇を握るのは白く小さく細い指先。

漆黒の艶やかな長い髪の一筋一筋。

その全てが風に踊る花びらを、水に漂う花びらを思わせた。

儼かでどこまで澄んだ清らかな、この世の全てを慰め浄めるような舞。

その子の舞を見ること以外、何も考えられなかった。

舞を見ることが全てだった。

声を掛ければ、その幻想的な風景を壊してしまいそうで、女の子が消えてしまうのではと身動き一つ出来なかった。

何があってもその夢を思い出すと不思議と慰められ、心を強く出来た。

## 倭に住まう者（前書き）

久しぶりの更新ですが、読んで下さる方がいらっしゃるようで嬉しいです。

これからも亀のようにゆっくりな更新ですが、よろしく願います。

## 倭に住まう者

倭。

南北に細く長く伸びた島国の名である。

もし、遙かな上空から見下ろす者があれば、龍を思わせる形をしていることに気がつくだろう。

国土の半分以上が山と森に覆われ、平地はほんのわずかしが存在しない。

わずかな平地の大半は田や畑になっている。

倭に住まう者たちは大きく3つに分けることが出来る。

1つめは、平地あるいは切り開かれた土地に住み、帝を崇め、庇護の替わりに税を納める者たち。2つめは、山や森に住み、優れた身体能力と力を持ち、自然と共に生きる身軽な者たち。

そして、最後はそのどちらでもあり、どちらでもない者たち。

この国に住まう神、この国を支える神の声を聴き、姿を觀、祀り、鎮める役割を担う者たち。

その役目上、彼等は全ての町・村・里に存在する。

彼等はただ一人をその頂点とし、神々に仕える。

故に、己が一族のみの命に従い、他の者の命を受け付けず、従うことはない。

彼等が居らねば、神を鎮めること叶わず、その地は荒れ、ただ滅びを待つのみとなる。

よって、彼等に逆らう者はいない。

誇り高き彼等の頂点にたちし者は、姫巫子ヒメコと呼ばれる。

姫巫子はこの倭で唯一全ての神を鎮めることの出来る巫子であり、倭に広がる全ての社を統べる者である。

姫巫女の言葉は神の言葉であり、逆らいうる者は一人として存在し

ない。

姫巫女とは、神の魂を持つこの世で最も清らで神聖なる穢れなき者である。

平地に住まう者を民、山森に住まう者を忍、神を祀る者を社人モリビトと呼ぶ。

倭に住まう者（後書き）

民・忍・杜人の区別なく、神を視し杜人は産まれ出でる。



## 護の里（前書き）

すみません。これを抜いて投稿していました。

## 護の里

ここは倭に数十ある忍の里のひとつ、護である。

民が分け入る事の出来ない山奥に木々に守られるようにひっそりと存在している小さな里だ。

老人とまだ見習いの子供達、合わせて40人程度が居残り組。下忍・中忍・上忍の合わせて50人程度がそれぞれの仕事に出ている。

見習いの子供たちは、手が空いている者に教えを受ける決まりとなっている。

里にある修練場の一画ではがっしりとした体格のいい壮年の男性が見習いの子供たちに指導を行っていた。

それぞれが男性の指示に従って真剣に取り組んでいる中に、一人だけ端の方で木に寄りかかっている少年がいた。

つんつんとした、短くかたい黒髪。よく日に焼けた肌。好奇心に満ちた黒い瞳はほんの少し吊り上っている。一人離れているよりも、積極的に修練を始めている方が似合いそうな負けん気の強そうな印象を受ける。

少年の様子を目にとめた男性が近づいてきても少年は動こうとしない。

「裕真、皆を見習って動かんか」

男性の叱責にはかなりの迫力があるが、少年 裕真は平然とした態度を取り続け、従おうとはしない。どこ吹く風といった裕真の様子に男性の声はますます大きくなっていく。それにも一切の恐れを見せず、態度に変化は見られない。

そんな二人の様子にほかの子供たちの手が一人又一人と止まり、怯えた様子で男性を窺っている。

「情けない、それでも名誉ある守護者の一人か、裕真！」

嘆かわしそうに首を振りながら、男性が『守護者』と口にした途端、それまでいくら怒鳴られても変わらなかった裕真が嫌悪の表情を浮かべた。

「好きで守護者になった訳じゃあないね」

苛立だしそうにそう言つと、さっきまでとは別人のような動きで、男性の怒鳴り声を無視して、裕真は姿を消した。

男性から逃げ出した裕真は、里外れにある、一際高い木の天辺近くの枝に飛び乗る。

そして、虚しさと怒りを含んだ目でどこまでも続く緑の山々を見つめた。

ふと、空を見あげると、自由に空を舞う鷹を羨ましげに見つめた。しばらくそうしていた後、楽な姿勢で木に寄りかかると、目を閉じた。

いつもの夢を思い浮かべると、不思議と心が落ち着いていく。

あの時の少女がどんなふうになっただろうかと想像していくうちに、裕真はゆるゆると闇の中に沈んでいった。

「裕真」

声が掛る前に、近づいてきた気配に瞬時に裕真は覚醒した。見習いとはいえ気配を敏感に察知するのは里の者にしてみれば当り前のことだ。ましてや、隠されていない気配であればなおさらだ。

目をあけると、いつの間にか空は赤く染まり、日が沈みかけていた。  
「紅」

けだるげに裕真は少女の名を呼んだ。

明るい笑顔のよく似合う快活そうなその少女は裕真の幼馴染みであり、見習いの子供達の中でも、特に将来を期待されていた。

紅は不機嫌そうな裕真の横顔を見た。

「もうすぐ誕生日だね、裕真」

羨ましげに、紅が小さくつぶやいた。

「ああ」

紅とは対照的に嫌そうに裕真が答えた。

「裕真、何が嫌なの？13歳になったら、正式な守護者になれるんだよ！この倭でたった五人しかいない！何でそんなにやる気がないの！私がかわりたいぐらいだよ！」

「勝手に将来を決められているのがいいというのかよ」

「当たり前でしょう。姫巫女様にお仕え出来るんだから！」

「ふん」

一瞬紅を睨むと、裕真は姿を消した。

「裕真のばか」

苛立つように小さくつぶやかれた紅の言葉は、風に溶け誰にも届くことはなかった。

守護者とは、何者であろうか？

守護者とは、忍の中からわずかに5人のみ選ばれ、社人が帝しか会うことの許されない姫巫女に仕える事が出来る者の事である。

生まれた時から、体のどこかに刻まれた刻印が守護者の証である。

優れた力を持つと言われる守護者は忍の尊敬と憧れの的であり、守護者を里から出すことは名誉なこととされている。

そのため、里の期待を一身に背負う事となる。

裕真も例外でなく、常に上を求められていた。

ただの裕真として見られることはなく、常に将来守護者になる裕真として見られ続けてきた。どこに出しても恥ずかしくないりっぱな忍であるようにと、未熟であることは許されず誰よりも厳しい修業

が課せられてきた。

裕真にしてみれば、里の者から向けられる尊敬と嫉妬と憧れ、期待が重過ぎてしかたがなかった。期待に答えられない自分が情けなく、苛立ちのもとでもあった。

## 護の里（後書き）

守護者に掛けられる期待と羨望の裏にあるものは？

## 守護者（前書き）

前と変わってません。順番が変わっただけです。

## 守護者

13歳になる10日前、護の長に連れられて裕真は里を旅立った。里の皆、仕事から一時的に帰ってきた両親に見送られながら。裕真が、おそらく二度と帰ることのないだろう里を振り返ることはなかった。

民であれば20日ほどかかる道程を、日中は民に混じり、夜は走ることでわずか10日でたどり着いた。

それだけにたどり着いたときの裕真の体力は限界に近かった。

それは、長の年に合わない身軽で無駄のない動きに負けることが悔しく、必死に食らいついていった結果だった。

荒い息の下、横目で長を伺えば疲れた様子は全く見られなかった。

その様子に自分の力量を改めて思い知らされ、膝についた両手に無意識に力が入る。

裕真の誕生日の朝に姫巫女のいる本殿を見下ろす山にたどり着いた。「うわぁ、すっげえ」

見下ろした本殿の美しさに裕真は思わず、感嘆の声をあげていた。

桜。椿。山茶花。紫陽花。梅。金木犀。秋桜。百合。水仙。桔梗。菖蒲。

早春にも関わらず山から見下ろす本殿の広々とした庭には、美しい花々が咲き誇っていた。

季節を問わずに咲くそれらが美しい絵のような光景を生み出してい



た。

本殿自体も、余計な装飾の施されていない平屋造りであったが、長き年月を超えたものが持つ美しさと神々しさが庭と相まってさらに幻想的な印象を与えた。

「裕真、川にいくぞ」

茫然と本殿を見下ろしていた裕真に声をかけると長は、振り返ることなく水音に向かつていく。

長の言葉に改めて自分の格好を見下ろすと砂埃や汗にまみれており、お世辞にも清潔とは言いがたかった。

一瞬このまま本殿に行こうかと考えたが、自分でも汗臭く感じ、結局長のあとを追いつ、川で体を洗った。

十分に汚れを落とした後、両親が用意してくれた上等な布で作られた服を身に纏った。

今まで、目にしたことのない上等な布は、肌触りがよく気持ちが良かった。

それは、里でも腕利きといわれる裕真の両親が今まで貯めたお金で買ったものであった。裕真が生まれたときから、最後の贈り物に本殿において裕真が嘲笑されることのないように出来る限り上等な物をと努力を重ね、気持ちを込めたものだ。

裕真がその込められた思いに気付くのは、もう少し成長してからではあったが。

「護の里の者でございます。わが里より、守護者を連れて参りました」

身なりを整えた後、大木を用いて作られた巨大な門の前に二人は居た。そこで低く、良く通る声で長が自分達の到着を告げた。

しばらくしてから、ギギイと重たい音をたてて扉が開いた。

扉の向こうには、年嵩の1人の巫女と武器を持った2人の神兵が立っていた。

長は巫女に向かってすつと膝まずき頭を下げた。

「何用です」

冷たい巫女の声が響き、神兵が威圧的に睨む。

その様子は穢れた忍が聖域たる本殿に何の用があるのかと、見下しているように裕真は感じた。

それは裕真の反感を買うのに十分過ぎるほどだった。

同時に、裕真はそんな態度をとられたにも関わらず、なおも膝まずく長が卑屈に見えて、仕方がなかった。

「私は護の里の長でございます。わが里に生まれた、守護者である、この子が13になりましたので、こちらに参りました」

冷たく射るような目で巫女は裕真を見た。

そんな裕真の憤りに気付かないように、長は巫女を敬う態度を崩さない。

それを巫女は当然のように受ける。

「見せなさい」

裕真は思わず、反抗したくなるのを長の目線でぐつとこらえた。

いささか乱暴に右手にしていた指なしの皮の手袋を外し、巫女の前に突き付けた。

裕真の苛立ちに応えるように普段は消えている鮮やかな炎を思わせる痣が右手の甲に浮かびあがっていた。

巫女の氷のように冷たい指が何度も疑うように痣に触れ、ぞくり、と裕真の体が震えた。

しばらくそうしていたかと思うと、ふいに巫女の指が痣から離れた。思わず息を吐き、我知らず息を止めていたことに裕真は気付いた。巫女に気圧された自分に苛立ちを感じ、それに気づかれまいと表情

を変えないように努める。

「確かに守護者ですね。着いてきなさい。ご苦労様でした」  
長を一瞥し、一声かけるとそのまま身を翻した。

遠くから足を運んだ長を労うこともなかった。

そんな巫女の態度に、裕真の苛立ちはさらに増す。

一瞬、この場から立ち去る事も考えた裕真だが、長の視線で渋々と巫女の後について歩きだした。

重たげな音を立て、扉が閉まる。

裕真にはその音が自分を縛る鎖の音に聞こえた。

巫女は神兵に目で下るように促すと、裕真の先に立って歩きだした。広い本殿を歩き外れの方に位置する一室に裕真を案内する。その間、巫女が裕真に話しかけることはなかった。

（忍に掛ける言葉はないってのかよ）

巫女の態度に裕真は否が負うにでも社人に対する反抗心が増して行くのを感じた。

「ここで待っていていなさい。姫巫女様に申し上げて来ます」

一言の労いもなく、取り付く間も持たせずに巫女は去っていった。

「姫巫女様ねえ、どうせ俺らを蔑んでんだろう」

倭に住まうほとんどのものが敬意を示す姫巫女に対して裕真は嫌悪感しか持てなかった。

裕真にしてみれば、姫巫女は自分を縛り付け未来を決定させる、許しがたい存在だった。

ふうと息を吐くと裕真はぐりと案内された部屋を見渡した。左右は漆喰の塗られた壁になっていた。入口は透かしの入った障子にな

っている。正面は上半分が明り取り用に障子になっており、下半分は漆喰に覆われていた。

日当たりは悪くなく、下にひかれている畳も新しいものらしく、衣草の匂いが漂って来る。

また、質素ではあるがよく見れば手の込んだ上等な物と分かる物ばかりが部屋に置かれていた。

（こんな端の部屋にまで上等な物が置いてあるな）

山の上から見た本殿の形と歩きながらそれとなく観察した間取りを思い浮かべ、現在地を確認しながら裕真は思った。

びっくり、とわずかに裕真は体を緊張させた。

裕真の居る部屋に向かって軽やかな足音が聞こえてきたからだ。

足音や微かな衣擦れの音から推測を立てる。

（巫女か？俺と同じか少し小さいくらいだな。何か持っているのか？）

ガラツと勢い良く開いた障子の向こうにいたのは長い漆黒の髪を持った裕真と同じぐらいの巫女だった。

裕真はその巫女の顔に思わず声を上げそうになった。

いくぶん子供らしい丸みが残るその巫女は、間違いなく裕真が夢で見た少女だった。

裕真が想像していたのよりも、遥かに綺麗になっていたが、その子が夢で見た女の子が成長した姿だと、なんの疑いもなく裕真は確信すると同時に、胸の奥が熱くなった。

（何でここにいるんだ？いや、それよりやっと会えた。ずっとずっと会いたかったこの子に。あの夢がどれだけ助けになったか。礼をいった方がいいのか？だけど、この子がおれのことを知っていると限らない・・・んだよな）

今更ながらに、自分で出した結論に思わず裕真は落ち込んだ。

「どうしたの？大丈夫？」

自分の顔を見たまま動かない裕真に、不思議そうな表情を浮かべ、

澄んだ声で巫女は声を掛けた。

「いや、なんでもない」

少女の声に我に返ると、いささかぶつきらばうに裕真は答えた。  
内心混乱すると言動が荒くなるのは、裕真の悪い癖だった。

「そう？」

ぶつきらばうな裕真の言葉に少女はたじろぐことはなくほつとしたように頷く。

次いで、はいと手に持っていたお盆を裕真に差し出した。

繊細な蒔絵の施されたお盆の上には、白磁器のお茶が入った茶碗が1つ乗っていた。

「飲まないの？」

急に差し出されたお盆に驚き、わずかに身を引いた裕真が手を伸ばそうとしない様子に悲しそうに少女は顔をふせた。

「いや、あつとその、だから」

忍の心得のひとつに自ら手に入れた物、用意したもの以外容易に口にするな、信用するなというのがある。  
何が入っているか分からないからだ。

用心を重ねることは必須であり、それは里のものが修練を始める上で真つ先に教わり、叩き込まれることだった。忍にとってそれが生死を分けることも多いからこそその教えであった。

裕真は真面目に修練を行っていたわけではなかったが、心得はすでに習慣に近いものになっていた。

だからこそ、ようやく会えた少女が差し出したお茶であつても手を伸ばすことができなかった。

「私の入れたお茶飲めないの？」

半分涙声で少女が尋ねる。

少女の様子にどうして良いのか分からず混乱している裕真の様子に、少女はくすりと笑った。

急に響いた笑い声に固まった裕真に少女は笑いかけると、自分が運んで来たお茶を一気に飲んで見せた。

「毒なんて入ってないですよ、守護者様」

裕真の驚いた顔にくすくす、と明るい笑い声を響かせながら少女はさらに言葉を続けた。

「まさか名前を教えないなんて、いませんよね？人の入れたお茶飲まなかったんだから」

ついと裕真の顔を下から覗き込み、笑ってみせる。

「ゆ、裕真、だ」

急に近くなった少女の顔に思わず、顔が熱くなるのを感じながら、答えた。

「ゆ・う・ま、裕真。いい名前ね」

少女は、確かめるようにつぶやくと満面の笑みを浮かべた。

「……あ、ありがとう」

一瞬、その笑顔に見とれ、その事が恥ずかしくて、口ごもってしまった裕真の様子に、くすくすつと堪え切れない笑い声が少女から聞こえた。

少女はなんとか笑いを治めると、真面目な表情になりずっと裕真に頭を下げた。

「お邪魔しました」

それだけ言つと裕真が引き止める間もなく、パタパタと少女は走り去って行った。

しばらく、啞然とその後ろ姿が遠ざかって行くのを見ていたが、くつと、裕真から笑い声がこぼれた。

幼い頃からどんな風に成長しているのか、どんな性格だろうか何度も想像していた。

何となくおとなしく、おっとりとしているのだろうかと思像していた。

しかし、実際の少女は、想像とはまるで違っていた。

いい意味で期待を裏切られたのが嬉しくて仕方がなかった。

「こっちの方がいいな」

元気で人なつこくてよく笑う。

そして、嵐のように人を翻弄し、焼き付かせるように強い印象を残して行く。

少女の様子を何度も思い浮かべ、笑いながら、ふと自分からしくもなく少女に会うまで緊張していた事に気が付いた。

「今度、会ったら名前、聞かないとな」

少女に会えた喜びに少女が社人であることさえどうでもよかった。

少女が去ってから、裕真は近くに誰も居ないことを確認すると、壁に寄り掛かった。本殿に来るまでに、昼夜ぶつ通しでほとんど休んでいなかったため、疲労が溜まっていた。

（これから、なにがあるのかわかんねえんだから休んでおくか）

そう考えると、目を閉じた。

## 守護者（後書き）

夢に現れた少女と現で再会する。

少女が夢に現れ、再び出会ったその意味は？



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8085a/>

---

姫巫子

2010年10月21日20時52分発行